

第 6 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 8 月 22 日（月）午前 9 時 30 分～午後 0 時 30 分

2 場所 長野県佐久勤労者福祉センター 第 5 会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	中沢 裕委員
遠山 順孝委員	西村 廣一委員
小林 將喜委員	市川 久由委員
太田 節委員	原 貞次郎委員
和泉 碩也委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

若干時間が早いようでございますが、皆さんお集まりでございますので、それでは委員長、よろしくお願ひしたいと存じます。

（飯島委員長）

はい、分かりました。

おはようございます。

（全員）

おはようございます。

（飯島委員長）

本日は滝澤委員ご欠席の連絡がありました。なお、芹澤委員と西村委員は、今日は、月曜日ですので、公務を済ませ、1 時間ほど遅れるということで連絡がありました。

それでは始めたいと思います。

本日も資料が出ております。資料の説明を事務局から受けたいと思います。

それでは事務局、お願いします。

5 資料説明

高校教育課植松主任教育支援主事から資料説明【説明内容省略】

(飯島委員長)

前回委員会で、委員の皆さまから資料請求があったものに関しまして、事務局から説明がございました。資料について何かご質問、ご意見がございましたら、お願いします。

(原 委員)

ちょっとよろしいですか。

今、提出された資料 1、2 以外で、前回お願いした資料があり、総合学科にかかわって専門性がどうなのか。農、工、商、さまざまな資格取得が現在ありますが、それが総合学科ならどうなるかということでもあります。

お願いします。

(飯島委員長)

事務局からお願いします。

(植松主任教育支援主事)

お願いいたします。

現在調査中でございまして、もうしばらくお時間をいただきたいと考えております。

(飯島委員長)

原委員、よろしいですか。

現在の工業の職業科で取得できる資格が、総合学科になった場合どのように保証されるかというその辺の資料だったと思います。

それでは次回、出していただくようにお願いしたいと思います。

資料についてのご質問はよろしいですか。

それでは前回に引き続きまして、魅力ある学校づくり、その話がずっと続いておりまして、ひとつの結果というところまでいきませんが、委員の皆さんのご意見がある程度出尽くしたというところで総合学科、そして多部制・単位制のことについてご意見をいただくような委員会になっていったと思います。

その中でこの第 2 通学区では、総合学科を設けたほうがいいのか、あるいは多部制・単位制を設けたほうがいいのか、そういうご意見をいただいたわけでありまして。いろいろな前向きなご意見をいただいたというふうに確認しております。

今、原委員のほうから出ました資格取得についてはまだ確認されておりませんが、総合学科におきまして、志学館を見てもいい結果が出ているから、ぜひこの第 2 通学区にも設けたらどうか。最終報告では 1 校以上となっているが、できれば交通の便も考えながら、2 校設置してもという話もあったように記憶しております。

そして多部制・単位制につきまして議論が移ってきました。その中で多部制・単位制、特に定時制を引き受けるということから、距離的な問題、あるいは少人数での学級運営について、そんなお話が出ていたと思っております。

その辺のところの続きのお話をしながら、この地域に多部制・単位制を導入するならばどうなるか、お話をいただければと思います。県から出されたたたき台は丸子実業を総合

学科へ、野沢南を多部制・単位制高校にというものが出てきていますが、そういうことを見通しましてご議論をいただければと思います。

（小林委員）

今日の資料 1 に出していただいたわけですが、進学先というので、5 区でいいますと上田市は上田千曲が 15 名、上田が 17 名、それから 6 区でいいますと、佐久市が野沢南へ 9 名、北佐久郡が小諸商業へ 6 名、野沢南へ 5 名と断トツに多いわけですが、これはたぶん生徒が通う距離、どこの学校で学ぶということも、何を学ぶということも、大事に考えているだろうと思いますが、それ以上に通学距離、夜間、夜帰るその安全というようなことも含めて選んでいるのではないかなと、私は考察いたします。

それでこれを見ますと、上田千曲に小諸市から通うことは交通の便、同じく上田に通う者は交通の便かなと思っています。現在、定時制に通っている生徒の通学方法は、バイク通学があるのか、それは許されているのか。それから定時制だけではなくて、ほかの全日制でも通学するときのバイクの許可等はどんなふうになっているのか。これがご質問です。

ということは、今度できる多部制・単位制というのは夜間だけではないということもありますが、自分の家から学校までの距離というのに左右されるのではないのか懸念もありますので、意見とともにご質問申し上げます。

（飯島委員長）

どうでしょうか。

事務局。

（植松主任教育支援主事）

それでは、ただいまご指摘がございました、特に定時制関係での通学につきましてでございます。バイク通学等につきましては、原動機付き自転車に限っているところが多いかと存じますが、16 歳になれば一応免許は取れますので定時制につきましては、生徒の就業状態等もいろいろ考慮しているかと思いますが、バイク通学等は一般的には許可をしているところが多いというように承知してございます。

また年齢的に 18 歳になれば、やはり普通免許も取得可能でございますので、学校によっては自動車での通学を許可しているところもあるかと存じます。

また全日制につきましても、地区ごとに若干状況が異なるかと思いますが、それぞれの交通事情等も考慮しまして、バイクの使用を許可している学校もあるというように存じております。

（飯島委員長）

学校要覧を見ますと、自転車通学、バイク通学、自動車通学なんていうのも、小諸商業の場合はできておりますね。定時制の中で見ますとバイク通学が 2 名、自動車通学が男子で 14 名、女子で 8 名ほどいと学校要覧に出ていますね。

そして通学は、大体 1 時間以内の範囲から通っているように、この要覧では見受けられます。ただ驚いたのは、小諸商業の定時制は千曲市からも来ていると。1 年生です。

これはどういう事情が分かりませんが、ほかの定時制のほうを見ている、自分の地域から通っているところはよく分かるのですが、非常に遠隔から通っているという生徒が何人かいるというのも、実情は分かりませんが、学校要覧から見て取れました。

ほかによろしいですか。

（荻原委員）

魅力ある学校づくりということで、県教育委員会がリーダーシップを取って、その目玉としてこの学区では総合学科1つと、単位制・多部制に1つ転換するというのが基本的な提案だと思っていますが、円満解決するには5区、6区に1校ずつ計4つ、総合学科2つ、多部制・単位制2つと、1校ずつというのが円満解決には一番いいのだと思います。

しかし財政とかいろいろな状況で、なかなか難しいというお話ですが、具体的に最終報告にもありますように、多様性とか進路の選択というところで、やはり子どもたちが要求するならば、あるいは父兄が考えるならば、それでいいのかどうか。

土台的に言えば、総合学科というのも進学が普通高校で8割から9割ぐらいであり、職業高校でも7割：3割ぐらいの割合で進学志望が多いというところで、総合学科というのは大学あるいは短大、進学でいうと専門学校も含みますが実際はそういった学校で中間層を引き上げていくという、そんな格好が総合学科なのか。

それから多部制・単位制になりますと、定時制という部分もありますが、最終報告にも出ている向学心養成というのは、そんなにも増えてどんな生徒をターゲットにしているのか。私とすれば、やはり定時制と基本的な学習あるいは向学心を養成する学校が多部制・単位制なのかなというイメージは持っておりますが、その辺について県の教育委員会のリーダーシップということが叫ばれております。

そのターゲットというか対象生徒、その辺は具体的にはどういうふうに考えているのか、単位制・多部制、総合学科を5区、6区に1校ずつできないのだろうか、その辺につきましてお答えをお願いしたいと思います。

（飯島委員長）

前回までで同じような質問を確か出ていた感じもしますが、重複するかもしれませんが事務局でお答え願います。

（柳澤教育主幹）

はい。

ひとつは多部制・単位制はどのような生徒をターゲットにというお話がございましたが、前回に多部制・単位制高校のイメージということで、県が現在考えている「こんな多部制・単位制を」ということで、資料をお出ししたものがございますが、その中にも書いてございますけれども、現在定時制に通われている生徒さんの54%くらいは、中学校までに不登校を経験された方というようなことで、そのような資料を以前お出ししました。

今の高等学校に学ぶ生徒の学び方というのが多様になってきております。そういうことのニーズに応えるということで、自分のライフスタイルに合わせて午前に、あるいは午後に、あるいは夜間に、あるいは昼間ずっととか、いろいろな自分の生活に合わせた学び方

ができるというのがひとつの多部制・単位制の利点だろうと思っています。

そういう中で、非常に幅広いニーズに応える可能性があるだろうと思っております。先ほど申しましたその資料の中にも、例えば自分でこの目的に合わせて得意科目を伸ばして進学を目指したいというような生徒さん、あるいは何かレッスンに通わなければいけないという事情から、ある曜日は出て空けておきたいとか、あるいは仕事の関係で午後から夜間は空けておきたいとか、いろいろなニーズに応えることが可能だと思っておりますので、そういう意味では幅広い学習ニーズに応えられるシステムではないかと、こんなふうに思っております。

それから旧通学区ごとに、5区、6区に1校ずつはどうかというお話がございましたが、検討依頼事項の中でお願ひしてありますように、総合学科や多部制・単位制につきましては、当面各通学区に1校設置ということをお願いしているわけでございます。

総合学科も、塩尻志学館が実績を上げて、成果を上げてきておりますが、すべての学校を総合学科にするというそういう発想ではなく、専門高校もあれば、普通高校もあれば、そういう中に総合学科という選択肢も、それぞれの通学区に1校ずつは、当面つくっていいということでございます。

また多部制・単位制につきましても、それぞれ例えばここで言いますと、5区、6区両方にということで、果たしてそれだけニーズがあるかどうか問題もございしますので、当面この第2通学区に1校を設置して、それを充実させていこうと、こんな考えでお願ひしたいと思ひます。

（荻原委員）

ニーズがあったらというお話なのですが、例えばリーダーシップを取るべき教育委員会が、1校で取りあえずやってみようということなのか、そういう格好で生徒が来るからやるのか、その辺をちょっとしっかりしないと、いざつくってまた転換するという格好ではまずいと思うのです。

前の多部制・単位制のことも見ても、いろいろな学科をつくって、また減らしたり、増やしたりしているわけですが、当然それは時代の流れでやりますが、例えば具体的に、今度候補が挙がっているところに約800名の生徒がいるわけですが、それを多部制・単位制に転換すると、その800名はどこへ行くのか。

クラスは大なり小なり減るにしても、そういった格好で、行く先という部分で、その辺はどういうふうに考えていらっしゃるのか。

（柳澤教育主幹）

現在旧通学区でいう第6区であります。第6区の中に11校の県立高校がございします。その再編候補案の中では東信地区での総数決定基準に基づいた学校数ということをお願いしているわけでございしますが、多部制・単位制に切り替わりましても、当然そこに行っている生徒さんに相当する分、当然生徒数も減ってまいりますのでそのままの学級数ということではございせんが、当然ほかの学校のところでカバーできるように募集定員は設定をしていくということになるうかと思ひます。

(佐藤副委員長)

多部制・単位制について、まず私が疑問に思うのは、今、候補に挙がっているところは独立校ですよ。ですから先ほどの質問のとおり、多部制・単位制で独立校を維持していくというのは、定員確保の問題とか、そういう点で非常に無理があるのではないかと。それがひとつです。

それから本来多部制・単位制というのはどういう形にしる、私は前回も申し上げましたが、通学困難な方が対象ですよ。定時制にしる、不登校の方にしる、そういうことになりますので、やはり通学困難な人がより通学困難な制度にしてしまって、始めていいのかなと思います。

私は今日出してもらったこの資料を見させてもらって、上田地区、これは上田千曲と上田が統合する。二通では小諸と佐久ですね。そこら辺から見ますと通学には非常に無理がある。

本来この多部制・単位制というのはひとつの独立校として、まとめてしまうという考え方自身に非常に無理があると思うんですよ。ですから当然まとめることによって、経済効果の問題もいろいろ考えてのことでしょうけれど、やはり一番学習困難なところへ、困難な条件を重ねていくということは、どうしても無理があると思います。

私はせいぜいこの第2通学区に関しては、上田は1つに統合。それから佐久と小諸、これについては今までどおりのような形で、分校的な形にすると。上田にセンター的なものを置くというような形のものが、ベターなのではないかと思います。ほかに無理なことをやっても、多部制・単位制に関しては、かなり工夫をしても本来は無理だと思います。生徒のニーズからいっても、非常に無理があると、そういう感じがします。

以上です。

(飯島委員長)

ちょっと、私も佐藤委員のように疑問を持っておりまして、今回本当にお恥ずかしい話ですが、委員会を開くにあたって、もう1回定時制高校の再編整備にあたってという県教委で出した、3回目のときの一番目の資料を見させていただきました。

そうしますと多部制・単位制を佐久地方に1つと。しかし小諸商業の定時制は、そのまま置いておくんです。ですから小諸商業を廃止するという文言は、どこにも出てきていないのです。

それで上田と上田千曲は、坂城高校が多部制・単位制になれば廃止して向こうへ持っていくと。そういうふうに見て取れたものですから、そうすると小諸商業の定時制はそのまま残る。そしてここで名前を出してはいけないのかもしれませんが、野沢南が多部制・単位制になって、定時制がそのまま残って午前の部と午後の部のところは、第2通学区全部から集まってくる。

昼間だどこにできるにしる、通学が可能かなと、思ったのです。私の解釈が間違っていれば県のほうでご指摘いただきたいと思います。この辺の見方をもう一度ご説明いただければとありがたいと思います。

(吉江高校教育課長)

すみません。

いろいろと多部制・単位制の関係について、ご質問やご意見をちょうだいいたしましたありがとうございます。

今、委員長さんのほうでおまとめいただきましたように、まず資料1でご説明をさせていただきますと思います。

私どものほうの今の案は、資料1の中の上田千曲と上田高校は統合ということで、両校とも定時制はなくなるという前提で考えております。それで小諸商業高校につきましては、このまま従来型の定時制で残りまして、一応ここにある名前をあえて使わせていただきますが、野沢南高校につきましては多部制・単位制でどうかと考えております。

この中で生徒さんの流れにつきまして私どもが想定しておりますのは、第1通学区、北信につきましては現在、坂城高校を多部制・単位制にしようと考えておりまして、坂城高校と上田方面のしなの鉄道でのつながりを考えた場合に、坂城高校に行っていただける生徒さんとか、あるいは違う高校に行っていただく生徒さんの中で、上田千曲と上田高校につきましては、十分対応可能かと考えております。

また我々は基本的には定時制の統合の場合に一番考えましたのは、現在非常に少なくなっているとはいいいましても、現状においてお仕事をされている勤労学生の方がいらっしゃいます。その方々が、ある程度以上の仕事を終わってからの通学可能地域ということ考えた場合に、上田千曲と上田につきましては坂城という1つの高校があるとして、小諸の場合はなかなか直ちに動ける場所が厳しいのではないかと思います。また野沢南も同様の問題があるということの中で、それぞれ小諸商業は現状のまま、さらには野沢南高校につきましては多部制・単位制でどうかという考えになりました。

それで多部制・単位制で申し上げますと、恐らく小諸商業の定時制というのは、仮に野沢南が今後多部制・単位制になるとすれば、いわゆる昼間でもいいという生徒さんは、かなり野沢南に流れるという想定をしております。また、上田千曲、上田高校におきましても、昼間でも可能だという方につきましては、先ほど申し上げました坂城高校に流れる生徒さんと、野沢南に流れる生徒さんもいらっしゃるだろうということを考えた次第です。

それと加えてちょっと申し上げたいのですが、現状において多部制・単位制の独立校という位置付けではありませんが、松本筑摩高校が多部制・単位制高校という位置付けを反面持っております。それでこの場合には、どちらかというと全日制というのが生徒急増期に逆に入ったということで、そもそも当初は定時制というような位置付けでできた学校だったのですが、ここは1学年で2学級募集が80人募集をして、倍率が80人を超えているという状況になっています。

その流れの中、またさらに申し上げますと、最近のひとつの流れとしましては、一応多部制・単位制はもちろんスタイルでは減という位置付けにはなっておりますが、先ほど来お話が出ておりますように、恐らくは多部制・単位制がスタートいたしますと、現在の全日制に行かれている生徒さんが、ある程度以上希望されるのだろうと思います。

またその中では、この言葉がいいのかどうかということではありますが、私どものほうでご提案している報告書の中にございますように、いわゆる向学心育成高校、このような位

置付けのものも含めまして、かなり多岐にわたった教育を実施することができるような位置付けになっていると考えている次第でございますので、よろしくお願いいたします。

（原 委員）

最初に通学の手段の問題が出されましたので、少し実態に即してご紹介をしておきたいと思います。今日のような車社会ですから、これは全日制の生徒も当然ですが、18歳になると多くの高校生が車の免許を持つようになります。これは定時制においてもまったく同じであります。バイク免許を取り、そして車の免許を取り、維持費に苦労しながら車を購入して学校へ来るという生徒が、どんどん増えています。

ただもうひとつの問題がありまして、さまざまな成育歴、その他の背景を持つ中で、怖くて乗れない、車に近づけない、自分で運転するなんてとても考えられない、そう言っている生徒も少なくはないのです。引っ込み思案というか、そういうことになかなか足が向かないという生徒諸君もかなりいることを、一言触れておきたいと思います。

それからかなり遠距離から来ている生徒というものも現にいるわけで、ほかの定時制でもそうですが、これについてはそれぞれがかなり複雑な事情を持っています。これはプライベートな問題ですから、これについては残念ながら触れることはできません。

ただそこで、今、問題になっている多部制の問題で、先ほど佐藤委員さんが申し上げられているような点が、私も感じているところで、非常に無理があるのではないかと前々から申し上げているわけです。

少し視点を変えて考えたいのですが、さまざまなニーズがあるというふうに事務局では盛んにおっしゃっています。学びのほうも多様になっていて、昼間学ぶ、夜学ぶと、こういうことも、もちろんそういう流れが一部にあることは承知していますが、私などが今形態的に見ているのは、本当に不登校で学校へ来るのがやっとという、そういう生徒が1年生から2年生、3年生になっていくに従って、彼らの持つ強い願望は、やはり働きながら学校へ行きたいということなのです。

どこかの統計にもありましたが、1年生よりも4年生のほうが就労率は高くなっているわけです。つまりかつての定時制とずいぶん様子が変わってきたとは言いながら、昼間働いて夜勉強するのが、彼らなりの学校像、望ましい学校像なんですね。

夜間の定時制の持つ意味というのは、決してなくなっているわけではない。だんだんその4年間の中で、自分の求める学校像というのを明確にしながら、通ってきているということがとても大事なことだと思うのです。

それからもうひとつ、さまざまな形態で働きながら学ぶということは、苦労は伴うわけですが、昼間働いて夜学ぶ。今度は逆に、昼間学んで、しかし今、生活上大変な子どもが増えておりますので、何らかの仕事をしなければいけない、バイトもしなければいけない。

そうするといきおい、昼間学ぶことは、夜間のバイトなどに大きく頼るという可能性が出てくるわけです。これはやっぱりきついんです。非常にきつい条件になります。学び方には、確かにさまざまなニーズがある。多様である、ということまではいいのですが、さて具体論の問題で行くと、昼間学校に通って、もちろん午後からバイトすることもあるでしょうし、午前中もあるでしょうけれども、やはり大半は夕方からのバイトになっている。

このことは15歳や16歳、17歳の青少年女たちに、「こういうこともあるからどうぞ」

というふうに、あまり大きい声で言わないほうがいいのではないか。そういう点でも、多部制・単位制が持つ難点ということを考えたほうがいいのかもしれない。

以上です。

(中沢委員)

私も前から申し上げているのと重なるところがありますが、多部制・単位制について確かにこの世の中のいろいろな変化の中から見て、いろいろな生徒に対する対応の在り方、またニーズに応える、生活のリズムに応える、そういう中での必要性はあると思うんです。

問題は各通学区に1校ずつ、それは果たして独立校にするまで必要性があるかどうか、そこが不安で、そのバックに数字的な資料があれば説得力があるんです。この定時制の数を見たって、これだけで仮にこれが多部制・単位制に移った場合に、1校としての人数だって集まってできるのかどうか。そこが非常に疑問になります。

片や地域校の定員に達していない学校を統廃合していこうと。そういうところが非常に多く出ている気がするのです。仮に1学年20人、30人程度の生徒しか集まらなくても、独立校のひとつの学校として多部制・単位制高校を立ち上げていくのはどうかと思うんです。

そこが数字的な根拠が、より明確でない気がします。例えばアンケートを採ってみたらこれだけの必要性があるとか、あるいは中学生のアンケートの中にどれだけの多部制・単位制の必要性を感じている生徒が何人いるとか、そういうものがあれば説得力がありますが、どうもそこが見えないのです。

どうなのでしょう。

(飯島委員長)

はい、事務局のほうで、お願いします。

(柳澤教育主幹)

先ほど課長のほうからお話ございましたけれども、全日制に通われている生徒さんの中にも、この多部制・単位制を希望されている生徒さんも出てくるのではないかと思います。

先ほどの資料1の下の方にも、長野西の通信制に所属している生徒さんが、上田の427、小諸臼田で281と、こういう数もございますけれども、そういった長野市までスクーリングに行かなくても、この近くに多部制・単位制の独立校で通信制のスクーリングが受けられるような学校があれば、そういうニーズは出て来るんだろうと思っています。

それからイメージの資料をお話ししましたが、いわゆる生涯学習的な観点も考えられないだろうということで、現在松本筑摩高校、それから長野商業高校での生涯学習的な講座を設置しまして、地域の方々が学んでおられるわけですが、佐久の地域、あるいは東信の地域の生涯学習的なニーズにも応え得るような、そういった可能性もあるのではないかと、こんなふうに思っております。

今、中沢委員さんがおっしゃいましたが、実際アンケートを採って希望調査はしていませんが、平成15年に中学校3年生のアンケートを実施したのも資料でお出ししてござい

ます。「どのような高校があってほしいですか」という問いに、自分の好きな時間帯を選び、興味関心や進路希望で科目選択する多部制・単位制高校というものが、4番目で24%ということで希望が多い学校のひとつにはなっております。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

(佐藤副委員長)

一言いいですか。

私はちょっと認識不足でした。多部制・単位制というのは主に、現行の定時制を対象にした、あるいは不登校の通学困難な学生を対象にしたものと考えていたのですが、今、県教委からの説明ですと、多部制・単位制は単位制普通科を想定しているんですね。

そうすると中沢委員がさっきおっしゃったように、もしそうであるならば私はこれから入る学生、生徒さんは多部制・単位制というのはやっぱり定時制の拡大的なものにあたるかなというような中で、普通高校へ行く子どもが、単位制高校を希望するというニーズが、いったいどのくらいあるのかをつかんでおかないと、独立校として少なくとも5学級から6学級を想定されとなると、果たしてそれだけの生徒が集まるのか疑問です。

せっかくそういう独立した多部制・単位制をつくってみても、またこれが大きなお荷物的な形になりはしないかという疑問があります。そこら辺のことをしっかりつかんだ上で計画でないと、ちょっと説得性がないのではないかと思います。

以上です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

多部制・単位制、定時制、通信制の生かし方ということでは、最終報告の19のところに出ております。それが佐藤委員さんが言ったように、数字的な裏付けがあって動けるといふふうに、その辺のところがあると思います。

確かに定時制の人数だけでは、独立校は成立しませんから、午前・午後の部にどれだけの子どもたちが、生徒たちが集まってくれるかということなんだろうと思います。確かに今、千曲高校は先ほど課長からお話がありましたが、80人の定員のところを100人の応募があったということでありますが、その辺のところ、私もよく分かりませんがご意見がありましたらどうぞ。

(市川委員)

お願いします。

私は中学の現場と高校の現場を知っている中での実感として、もしこのような単位制が出てきた場合には、恐らく生徒は相当数集まってくると思っています。そうしますと、例えば蓼科高校の先生たちは数年前、各中学校をだいぶ回っていらっしゃって、蓼科高校はこう変わります、というような訴えを盛んにされまして、一人一人の面倒をみる、学びたい力を、学びたい意欲を持っている者が蓼科高校へ来てほしいということで、蓼科高校の

先生方が大変努力されて回っていらっしやいました。

その上に田中駅からバスが1本出ることになりました。そうしましたら、その次の年は生徒が集まりまして、パーセント条項にすべて引っ掛かって、先生方集めていただいたからこんなに集まってしまいましたという経過がありました。

そのようなこともあります。この多部制・単位制は文科省でうたっている中では、基礎基本をじっくり学びたい人は来なさい、自分のペースで学びたい人は来なさい、体験的な学習に興味のある人は来なさいと謳っているわけです。

この学校が、「いつもでも誰でも自分のペースで進んで学べる学校ですよ」というふうにうたっています。そうしますと、これに対して中学生はどういうふうに答えたか。先ほどの説明にありましたアンケートの中に、半数近くがもう一度中学の勉強を基礎からやり直したいと思っているわけです。

子どもたちは高校に入って、半分くらいの生徒はやはりきちんと勉強したいなと思っているわけです。本当に実現したら、新しい高校としてシステムとして機能していく、間違いないシステム的に変わったものだと思います。今までの学年単位で進められるものから、一人一人のニーズに合わせようと、うたっているものだと考えます。

しかしながら今の高校の先生方が、本気にそういうことを訴えられるかどうか、またこれは別の問題だと思います。施設ができた、システムができた、あとは高校の先生方が、この多部制・単位制をどういうふうに運営されるか、先生方がどう集まるか分かりませんが、このよさを訴えて、広く宣伝した場合については、恐らく現在の中学生の中で学習で平均点を超えられないとか、あるいは超えたけどちょっとという子たちは、私の実感としては目を向いていくかなと思います。この学校へ行くと、ひとりひとりの自分の事を聞いてくれるんだ。

高校に行くと卒業できるかどうか、単位を取ってきちんとやっていかないと、生徒指導でたばこを吸わないと、きちんとやっていかないと卒業できない思いながら行くのですが、ここの場合は違うなという、そういう生徒がたぶん多数出るような気がいたしますが、また詳しいことについては検討時点でご意見申し上げたいと思いますが、私はそういう考え方です。

実際にそういうふうなうたった学校は、交通の面がもちろん機能しておりますので、首都圏の例は挙げられませんが、実際に予想外の生徒が集まって、本来の機能を果せず、予定をうまく賄えず、たくさんの高校を改革しなければならないという事も出ているわけですし、交通の面の考え方と、また先生方の熱意の問題も出てくるかと思いますが、私は魅力を感じております。また必要性も感じております。

(荻原委員)

ただいまのお話ですが、それだったら私は進学制単位高校とか基礎教育単位制高校とか、何か多部制・単位制というといいいようなイメージが大変ありますが、会話をしようとしては今、普通科高校でみんなコース制、2年から選択制、習熟度、個別指導というような格好で、ものすごくやっていらっしやるわけです。

そういう意味では、進学型単位制というような格好で模様替えして、現在進学率というか専門学校まで含めれば、すごい数なんですよ。実際に行っているというのは、ほとん

ど9割近くになると思います。

そういう進路を選べる高校というふうになると、かえって単位制でも進学型単位制というのも、選択肢の中にはあってもいいし、先ほど吉江課長が言った向学心というか基礎的部分もやる、担う部分がこの多部制・単位制というような、そういう面もと言いましたが、そういうことであればやはりそれに対応するものとしては進路型単位制高校、具体的に現在普通高校でやられる大変各先生方が工夫されてやっているところは、そういう部分がものすごく多いのではないかと思います。

コース制とか習熟度とか、そういう格好でやっていらっしゃる現状は、やはりそちらの方向へ行っているのではないかという気がしますので、私としてはこれで多部制・単位制が、そういう向学心とか基礎的部分をもう1回やり直せるというのであれば、簡単に言えばもう1校、それなら進学型単位制だってあってもいいじゃないかという提案をさせていただきたいと思います。

(飯島委員長)

はい。その辺のところはどうでしょうか。今の普通高校の中の進学校を単位制にして、ご意見のように習熟度別にしながら進学校を変えたらどうかという意見であります。

(太田委員)

先回にお願いしてありました、大学への進学率に関するベンチマークの件で、結果が出ていれば教えていただきたいのですが。

それと、荻原委員からも提言されていますが、お客様である、生徒、保護者の立場から考えると良い大学へ進学できるということは、大変魅力があることではないかと思います。いうならこれが最高の魅力ではないでしょうか。ここにご出席の多くの保護者の皆様もそう思っているのではないかと思います。従来の高校教育の内容や学校運営等と一線を引き、法令、条例等の規制を取っ払い、徹底的に知力、体力をトレーニングするような高校づくりができないのか、この委員会では、このような論議もしていくべきではないかと考えます。

総合学科、多部制単位制の導入だけで、魅力ある高校づくりが実現できるのか、私は大変疑問を感じています。これが改革といえるものか、むしろ再編というのが適切ではないかと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

今日の新聞に、こと進学の件についてちょっと出ていましたね。県下の高校が進学に対してのランク付けになっているという。そして輪切りにして中学生を、その学校に振り分けているという記事が載っておりましたが、今回の改革がそれにどういうふうに対応していくかという話でありました。

その辺のところ、どうでしょうか。魅力ある学校づくりにまたちょっと戻ってまいりましたが、魅力ある学校づくりは当初佐藤委員から、自分の能力を最大限に発揮させてくれる学校。いわゆる能力を引き出してもらって、最終的には自分の望む大学へ進学させて

くれる学校が、魅力ある学校。

それから職業とか専門学校としてみれば就職に有利な、資格が取れたり、いろいろな要件が整った学校ということだったと思います。定時制の受け皿としては、不登校の子どもたちをはじめとして、そういう子どもたちを受け入れてくれる学校。

魅力ある学校づくりをそのまま3つに分けていただいた、ご意見があったと思うんです。その中で進学とか就職に迷っている子どもたち。これはキャリア教育というような形で、どなたか委員さんがお話ししてくれたかと思いますが、どういう方向へ行ったら分らない子どもたちを、1年間十分方向付けをしながら、何とか自分の方向を見いだしてほしいということで、総合学科というものをつくり出してきたというお話も、教育委員会のほうからあったような気がいたします。

そしてこれは市川委員だったと思いますが、ただ小さなグループというか、少子化が影響してきて小さなグループだけの学校にしてみてもいいものか。適正規模といいますが、やはり子どもたちが切磋琢磨（せっさたくま）する、その学校をつくっていく必要があるのではないかと。いろいろなご意見がありました。

そういうものを含めながら、私たちはどちらへ持ってくるか。その魅力ある学校づくりに、またちょっと戻りましたが、少しそちらのほうも行った来たりしても構わないと思いますが、ご意見をいただければと思います。

（原 委員）

前回か、あるいはその前あたりにも少し発言をした記憶があるのですが、単位制という問題について、もう一度ほぼ同じことの繰り返しになるかと思いますが、意見を申し述べたいと思います。

私は1970年に教員になりました。最初の学校で記憶していることは、山の中の全日制の小さな学校でしたが、生徒は結構自分で時間割をつくるのです。例えば水曜日の3時間目に、選ぶ科目が何もなく図書館で自習しているという、そういうことも実は当時まだ残っていたんです。

その例というのは、実はこの戦後スタートした現在の高校制度は、学校運営の特にカリキュラムの原理として、学年制と単位制を併用するということだったのです。ところが単位制を十分に展開するためには、教室の数がたくさんいるわけです。幾つもの選択に分かれますので。それから教員の数もたくさんいる。

その辺からなかなか難点があって、単位制というのが次第に影を潜めていって、本来だったらこの原理が生かされるべきだったにもかかわらず、学年制のみの形になっていってしまったということなんです。

私は持論として、単位制の考え方をもっと生かさなければ駄目だということを、いろいろなところで申し上げてきていたので、単位制の原理を生かすということは、やはり大事だと思うんです。

しかしそのことが、そのことだけで単位制高校ということに飛躍するのだろうかという問題があるのです。単位制の考え方を、例えばこの地域の幾つもの学校が取り入れる。ある意味では、幸か不幸か少子化の中でクラス減もあったりしてきていますね。そして教室も余ったりしているわけなんです。

ですから、単位制の考え方を取り入れての新しいカリキュラムの考え方は学校においては、十分可能になってきていると思うんです。そのことが第一点であります。

2 つ目は、教育委員会の課長さんがそういう言い方をされるというのは、少し抵抗を感じるのですが、いろんな学校があって、進学対応型であったり向学心育成であったりとおっしゃいますが、どうなのでしょう。そういうネーミングを用いたときに、世間ではどういうふうにとらえますかね。

向学心育成、基礎からきちっとやるという。もちろんそのこと自体は誰も反対をしない、とても大事なことなんです、学校のある種の差別的再編というふうに受け止められないでしょうか。私はその危険性を感じるのです。

現実には、本当に残念ながら高校に入ってくる諸君が、基礎基本がしっかり身につけていない。前に申し上げたように今、学習意欲が非常に弱まっている。こういう状況で、多くの学校は多くの高校は、本当に基礎基本からやっているわけです。さまざまなやり方を工夫してやっているんです。だからといって学校側がそれに合わせていくというのは、これは決して子どもたちの向学心に資することではない。

その点は、非常に慎重な対応が必要だと思うのです。

(和泉委員)

私たちは、総合学科と多部制・単位制というのは、ひとつの時代のニーズというか、これからの教育を過去やってきたところをメンテする部分があればいけないということで、取りあえず立ち上げは、各々通学区に一校一校はいるのではということ、まず意識としては分かります。

ただしその中で、先程から出ているんですが、高校に行って基礎基本あるいは自分のペースで体験ということを言ったときに、高校の位置付け、高校の責任というのは私はそうやってきたときは、中学校の位置づけとは何なのかと思っています。

だから今どき、中高一貫という言葉の学校ニーズが出てきてしまうんです。私は先程からの論議の中で、総合学科とか多部制だとか単位制は、ひとつのセーフティーネットの位置付けで考えるのはいいのですが、それが本業になってしまっているはいけない。本来やるべきところが、やられていけないということを、これを失ったら全部崩れていってしまうと思います。ですから学力低下や、この前の国際競争のランクの中でも本来やるべきところが、何をすべきかそれにギャップが出たらどうすべきかそれを考えるべきではないでしょうか。

私は小中高含めても位置付けを考えないと、中学校で間に合わなかったから、あるいはギャップが出たから、「高校でお願い」と言われても、今のレベルでは義務教育と称しているところは小中までしかやっていないのです。

高校は、それぞれに選択肢を与えて、その中で本人の能力あるいは人材の育成・人間教育をやっているわけです。そここのところの私たち受け取る側がよく分からない。それを「高校改革」と称する中で、すべてを受けているという意味については、少し考えなければいけないのではないかと意識はある。だから必要性は認める。

しかし私たちの時代と同じことをいってはいけないと思います。私たちの時代は本当にお金がなくて、勉強をしたくても行けなかったのです。これは事実です。お兄さんの服を

着てあるいはお兄さん、お姉さんの教科書を使って「おれは32ページだけど」と言ったら、隣のやつは「おれは52ページだ」と言われても、価値観を持ちながらやっていたのです。

そのところは前向きに、だからもう一回、ニーズがあるからという形ではなくてひとつひとつはやってみて、まだ十分考える価値観はある。だけど今の現実には起きている問題、社会ニーズからはひとつひとつつづらないと駄目じゃないのと、場所はどこにするかは別問題として、そういう意識は持っていますので意見として言っておきます。

（飯島委員長）

はい、大事なところであります。高校改革、しかも勉強がもうひとつという子どもたちを高校のところで救う、その手だても当然大事だけれども、その前の教育がどうなっているのかというところです。

これをどんどん追求していくと、家庭はどうか、社会はどうか、下へ押し付けていく可能性がありますので、大変これは難しい問題ですが、最終的には家庭がいけないんだという話で終わってしまうと問題ですが...

事実は、習熟度が不足している子どもたちが、多いことは事実であります。その辺のところを提案として、小中に要望するということは必要なのだなと思いました。他にご意見はどうでしょうか。

（太田委員）

今、和泉委員から中高一貫教育という問題提起がありましたが、昨年度第三者を入れ構築された答申案には、この件は一部触れられていたと記憶にありますが、今回の改革案には具体的に提示されてはいません。

他県ではすでに導入されているとの話も聞きます。なぜ長野県ではすすめられないのでしょうか。実験的な取り組みでも良いと思うのですが、このような切り口をもって、思いきった改革の一步を踏み出すことが必要ではないでしょうか。この点、とても歯がゆさを感じています。

（市川委員）

私もその点について、意見を持っているわけですが、お伺いしたいことがありまして、中高一貫で、その中高の中で入試制度を取っ払った格好ですよね。長期的な視野に立っての生徒の育成あるいは先輩後輩のつながりが長期にわたってできる。

高校3年生が中学1年生を指導できるわけです。スポーツ振興にも進路の関係にも非常に有益があると、私は宮崎の例で聞いております。

お話を聞きしたい中で例えば立科町の例でいきまして、遠山委員さん、その他の委員さんも、信頼ある高校をつくっていくことが大事だというお話を、以前いただいております。しかも魅力あるということで蓼科高校は、次から次へと取り組んできたと思っております。その中で例えば立科町の生徒が、そのまま交通のハンディを乗り越えてわざわざ地域外の行くということがなく、魅力あるところならば中高一貫でそのまま地域で育つということが可能ではないかと思えます。

その場合において中高一貫で考えていらっしゃることもあるのかどうか、それで考えて

いくと先ほどから出てきた多部制・単位制とのこととのコントラストですね。ビジョンが変わってくることがあるのではないかと考えているのですが、その辺について、ちょっとお考えをお伺いできたらと思っていますが、いかがでしょうか。

（遠山委員）

思いもよらず蓼科高校についてお話をいただきましたが、蓼科高校は周辺に高校がたくさんあり、交通の便も悪いということで、先ず立科町が町費をもって交通条件を整えることから始めました。

そして、何としてもイメージの良い高校にしなければ駄目だという事で、先生方に大変なお力添えを頂き時間をかけて苦労していただきました。

例えば、染め毛やピアスをしたり、ボタンをはずして歩く生徒のいない、礼儀正しい高校を目指しました。学校全体が「人の足を引っ張らない、本気でやる生徒を皆で応援する、そして自分も一生懸命やる。」というムードづくりに向けて、先生方や地域の人たちに頑張ってもらいました。そんな中で生徒が良くなったという評判が出て、中学校でも少しずつ良い生徒を送ってくれる様になりました。

こうなりますと中学の先生方も父母も蓼科高校を信頼してくれ、かつてのように学力中心の輪切りの進学指導だけではない方向に変わってきました。

長野県は昔よりも進学率は落ちたと言われていますが、長野県の教育は決して間違っていないと考えます。手を抜かないで皆で頑張れば、何か良い方向が見つかるかと確信しました。よろしくお願いします。

（中沢委員）

中高一貫校について、ちょっと出たので、その辺をもうちょっとお願いします。

もう4年くらいか6年くらい前か数字がはっきりしませんが、長野県の場合も中高一貫教育については、各地域にモデル校までにはなかったかも知れませんが、かなり具体的な検討がなされ、実践を伴う、そういうことがあったんです。

これは中高一貫校は、いわゆる併設型とか連携型とかあったのですが、いずれの形でもかなり中学校・高校での連携が保たれて、研究させられたことがあったのですが、いつのまにか、それはストップしてしまった。私はそのとき非常に疑問に思ったのです。

なぜこれだけ、それぞれの学校が実践していこうというのがあったのが切れてしまったのかと。それでしばらくしたら、高校改革プランの中のひとつの案として、中高一貫教育という項目が出てきたのです。これがまた、復活をして具体的になっていく方向が見えるかなと思ったのですが、実際の県教委の案には、各通学区にそういうものを1校設けるということではなく、ひとつの案として出されただけでありました。

その辺が、もう少し詰めてもいいのではないかと思います。ということは研究校では実績があるからということだと思えます。それに対して、多部制・単位制に戻っちゃうと、これはモデル校的なものは県下では松本筑摩高校ですね。あるいは長野商業の定時制における単位制があります。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。地元の私立高校が、中高一貫でかなりの生徒を集めています。それからもうひとつは高校が全入制度でない現時点で、中高一貫のこういうシステムが、位置付けることができるのかどうか。これは品川区ですが、中高でなくて小中一貫を取り入れていますね。

ですから、高校へ入ってくる子どもたちが、十分な習熟度がないということになると、逆に小中一貫できっちりやっていただくほうがどうなのかな。そんなことも考えなくもないのです。多少私の意見として、言わせていただきました。

ご意見ありがとうございます。

(西村委員)

今日、小諸高校の始業式でございまして、遅くなりましてすみません。前半ちょっといましてしたので会の内容がわかりませんが、中高一貫について私の個人的な意見を、述べさせていただきます。

先日 70 代、80 代の教員の O B の方と話をする機会がありました。小諸市ではその当時ですが、十何年前ですかね。中高のお互いの授業を見に行っただそうです。

英語の先生でしたけれども、英語の授業をお互いに見に行って、ここをこうしたほうがいいのではないかと、相当議論をしましたと。高校ではこんな教育をしたほうがいいですよとか、中学校ではこんなことしたらいいですよとか、そういう話をしました。ところが、それがどういうわけか途切れてしまいました。今は何もありません。

去年私は小諸高校に来まして、必ずお互いに参考になると思い、授業を見に行くようにしています。なかなか時間がなくて数回しか出来ていませんが、実行しています。私はずっと次のことを思っています。今、個人情報という問題があり、なかなか難しい面もありますが、こと教育に関しては、やはり情報というのは、共有化すべきだと強く思います。

小学校・中学校・高校と変わることによって情報が、プツンプツンと切れてしまいます。中学校の先生方が、「A 君について、こうしようじゃないか」と、いろいろやられても、それが高校の入学試験のというハードルあってプツンと切れてしまうんです。それでいいのかと強く思います。なかなか制度的に難しいこともありますけれども、ぜひこの中高一貫制度というのは私は大事なことだと思います。先ほど委員長がおっしゃった小中ということも可能性としてあるのではないかと思います。

現状一番多感な中学生・高校生と一緒に学ぶということは、私は全部の学校がそうしろとは言いませんけれども、必要なことだとわたしは強く思います。

そんなことを先輩から聞いて、意を強くしました。

(市川委員)

すみません。

先ほどの質問で、さらに付け加えさせていただければありがたいのですが、よろしいですか。

(飯島委員長)

どうぞ。

遠山委員に質問だそうです。

(市川委員)

夢科高校の特徴と、さらに進めまして、例えば私は行政の立場の方と直接お話ができる機会がございませんので、この際できればとおもいます。さらに進みまして、多部制・単位制を取る、総合学科を取る。もうひとつの選択として中高一貫として、小学校でも募集を始めて、中高一貫を始める。そのうちにスポーツで6年で育っていく、中学時代、中学のときも高校生が指導したり、6年間一貫したコーチが、中高の大会で活躍する。そのうち立科町の中学の何々部が成績をだんだん上げていく。

あるいは高校3年生が、大学の進学を模試でセンター試験に挑戦している様子を見て、中学1年生が6年後にはこうなろうとして努力する。

現に中学1年生は例えば家庭に、いろんなプレッシャーがあって、「この高校に行きなさい」とか、「そのために勉強しなさい」という視野で一生懸命やっている子が結構多いのです。

実は、いろいろな面で挫折したりしていました。高校から、中学・高校の段階で挫折する子は結構多いのですが、そういうこともいろいろあるわけですが、総合科の解消として中高一貫ということもあるわけですが、そのような思い切った大胆なことを考えや多部制・単位制でもいいんです。総合学科でもいいんです。そういった中高一貫とか、そういう大胆な改革は今後考えていく、地域の仲間とか、あるいは行政の考えがあるようでしたらありがたいと、と思っています。そうしましたら随分コントラストが、出てくるかなと思っております。

(遠山委員)

夢科高校はかつて何度か駄目になりそうになりました。地域の教育を考える時、高校を駄目にするわけにはいけないという意欲が地位の人に生まれました。

こうした中で、20年以上も前から町長を先頭に地域住民を含めた「夢高育成会」が結成され、地元高校を盛り上げようとしたのですが、地元中学の2/3は他の航行へ行ってしまう。上田とか野沢北とかへ行った連中が「東京外語大学に合格しました。」とか言ってくるわけです。地元の夢高の生徒で「こういう大学に合格しました。」と胸を張ってくる子供ができないのか。そんな気持ちで私もその時、教育関係の仕事をしていたので、「夢高育成会」を立ち上げ、初めて町に予算化させました。

何とか良くなければとあがいても進まない。そのひとつは中学の先生方が地元高校を理解していないことがわかり、中学校の先生方と地元高校の先生方と交流して「スポーツをやって、一杯飲もう」ということから始めました。

また、小学校の先生方にも一緒に入ってもらって、「話をしようじゃないか」という会を毎年持ってきました。

それから、中学生もやはり地元の夢高生と交流するために中学、高校の生徒のスポーツ大会を何回かやったり、剣道が強かったので剣道の交流や、夢科山の北部8町村の中学生

による「蓼北バレー大会」を毎年開催して、蓼科高校の生徒が指導したり審判をやる等、中学の子供と蓼高生と一緒にやることで、子供同士の人柄がわかり、「なるほど、兄ちゃんたちも本気でやっているなあ」とか実感したり、最近では小、中、高と一緒にごみ拾いもやる等人間関係をつくってきた結果、現在では大分地元高校に入るようになりました。

勿論、中学の先生方の力添えも大きいし、父母の意識も安心して出せる高校として変化してきたわけですが、今度は少子化で子供がどんどん減ってきてしまった。

とにかく、「小さくとも力いっぱいやる高校」を目指して、先生方が本気で取り組んでくださいました。部員ゼロから吹奏楽部を立ち上げ寝食を忘れて指導され、今ではジャズクラブで全国的にも有名になられた先生はじめ、土日を返上して体育や文化活動に尽力された先生方のおかげで、今では生徒の約 75%位が部活に入ってそれぞれ頑張っています。

しかし、蓼科航行の周辺には丸子実高や東部高校など大きな高校があるものですから、その中での魅力づくりは都市部の真似ではなく、田舎は田舎、田園風景の中で自分を鍛える、小さくともできるという誇りと自信ある高校にするために、学校と保護者と地域が一体とならなければ駄目だと思いました。

また、地域の行政も本気で力を入れなければと思いました。
最近では子供たちの状況が大変良くなっているろいことは何よりだと思います。そんなことです。どうもすみません。

（飯島委員長）

どうもありがとうございました。

蓼科高校を立て直している、町長さんのお話を聞きました。

それではここで 1 時間半ほどたちましたから、10 分ほど休憩をしたいと思います。この会場の時計の 11 時 10 分からまた再開をしたいと思います。

よろしくどうぞお願いします。

【休憩後再開】

（飯島委員長）

それでは、時間になりましたので委員会を始めさせていただきたいと思います。

（芹澤委員）

中高一貫の関係ですが、私は制度としては大変素晴らしいし、生徒にとっても、意欲のある生徒にとっては大変いい制度だと理解はしております。ただし現実の話、中高一貫でつくった場合、中学 12 歳の子どもに例えば南牧の生徒が汽車に乗ってどこへ行くのか。それぞれの地域を見ますと中高一貫全部ということではなく 1 校か 2 校だと思うのですが、12 歳の子どもが汽車に乗ったりして、毎日基本的に通えるのだろうか。そうすれば場合によれば寮ということも出てくるのではないかと思います。

現実には、佐久長聖中学には寮がございます。県立だとすれば、当然ただといかない。学費が安いから、長聖中学の希望者はむしろ学費の安いほうへ、県立の中高一貫校に集まるということと大変競争率が高くなる。当然いろんな各地から「ぜひそこへ行きたい」というの

は自然的ではないのか。

そういう中で、何校かつくるか分かりませんけれども、1校なり2校の場合12歳の生徒が登校して毎日通えるのかどうかということも考えなければいけない。寮をつくればいいという形でも、それまでちゃんとした覚悟がないと、この問題は県立での中高一貫という部分、都会ならば交通機関が発達しているんですが、佐久広域、佐久、上田と東御について、それほど公共交通機関が全部整っていない区域に、実現性があるのかどうかというその辺を考慮しなければいけないのではないかと。

制度として、考え方として私は大賛成でいいことだと思っています。その点はいいのですが、現実の話としては少し難しいものがあるのではないかとそんなことを思います。

以上です。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

他にどうでしょうか。

(西村委員)

今、芹澤委員からお話でしたが、私もそう思います。また、遠山委員のお話もお伺いしましたが、けれども、「つくる」というものは先ほどおっしゃたように、すごい力だと思えます。壊すのはすぐ壊れてします。つくるについて、なぜ立科町で出来たかという、やはり遠山委員のような強いディレクター、プロデューサーがいたんです。

やはり小・中・高全体に見て、どういうふうにもっていったらいいのか、全体を見渡せるプロデューサーなりディレクターがいなくてはならないと思えます。それが県教委にあたりますが、いかんせん県は全体を見なければいけないということでなかなか難しい。今、言われたように小さな政府が必要です。やはり教育でもそういうことが必要ではないかなと、私はつくづく聞いていて思いました。

例えば、東信地区全体を見るような形でのプロデューサーがいれば、小諸地区でもいいのです。そういった中でやっていくと、例えば学校を作るのは難しいけれども物理的に中高一貫の高校制度をつかって、一貫の学校ではないが、全体を見ているそういったプロデューサーがいて、うまくコントロールできるのではないかと思います。

みんなそれぞれはいいことをやっていますが、全体を見てやる、そういう形が、この教育の世界の中では抜けているのではないかと私は思っています。芹澤委員がおっしゃったようなことは、私も危惧しておりますが、そういうことをもしカバーするのであれば中高全体を見るような、そういったプロデューサーをおいておけばある程度カバーできないのではないかと私は思います。

(佐藤副委員長)

中高一貫の話というのは、私はしっかり調べたわけではないのですが、以前聞いたことがあります。これらの話がなぜ断ち切れてしまったのかお聞きしたいということがひとつ。

もうひとつは、私たちこの今日集まっているこの推進委員会ですが、先ほどの蓼科高校の例を聞いていてつくづく思ったことは、やはり強力なリーダーシップがあって、素晴ら

しい先生がいてという中で、非常に躍進してきたという話なんです、組織をつくる場合には、どなたが携わってもいつの時代でもしっかり運営していけるというものをつくっておかないと、そのときのある特定のリーダーシップのある人が出てきたときにこうなったという話は特定の例であって、私たちはそういう意味で推進委員会でしっかりした組織を、つくっていくということをしないと、特殊な例を挙げても「それは特殊な例だ」ということでそれは終わってしまう私は思います。

私たちは大変な仕事を背負っているんだと先ほど来聞いていました。

以上です。

その前半のところだけ、もしお答えいただければ。立ち消えになった話を。

(吉江高校教育課長)

すいません、お答えいたします。

中高一貫教育につきましては、国の制度改革、従来から私立の場合はあったのですが公立とかそういう広い意味での設置が可能になりましたのは、平成 11 年度からの法改正によるものでございます。それを受けまして、すぐに私ども教育委員会の中で、主にいわゆる連携高校、中高一貫校は 3 種類あります。

すいません、ほかの委員会で私も今のようなことを答えているせいで、申し訳ないのですが、場合によるとこちらの推進委員会ではお話ししていなかったかもしれません。

中等教育校ということで、1 年から 6 年まで前期が 1 年から 3 年までの通常でいう中学、それから後期が 4 年から 6 年までの高校というように分かれている、中等教育校という学校、それから併設型といいまして県立中学を隣につくりまして、その隣の県立高校を、言ってしまうと試験なしで入れるようにしていく形。

それから連携する言い方ですが、市町村立の中学校とその近辺にある県立高校との連携という形で、非常に簡便な試験を受けることによって高校へ入れるという形態。この 3 種類があるのですが、その主には連携校につきましていろいろな検討を加えた経過がございました。

研究校というところを指定しまして、この地域でいきますと軽井沢中学校と軽井沢高校もひとつの研究対象校ということで、いろいろ進めてきた経過がありまして、それを受けて報告書を出したりいただいた経過があります。

その報告書 11 年度末といいますか、約 12 年の初めくらいにお出しいただいて、そうこうしている中で私どもご案内のように、平成 13 年には通学区制の見直しの作業に入ったり、あるいは通学区制の見直しの後、いろいろご議論いただいております多部制・単位制とか、さらにはこの高校改革というようなものに着手した経過の中で、現時点において中高一貫校につきましては、結果的には高校改革に委ねていく形になっています。

それで今回中高一貫につきまして、なぜ例えば多部制・単位制とか、あるいは総合学科高校と同様に、例えば各地域に 1 校ずつという具体的なことを入れなかったかということで申し上げますと、ひとつのいろいろ魅力ある学校の例としては入れてございますが、長野県の場合には私立を除いては中高一貫校につきまして公立の位置付けで、現在ないということでございます。

総合学科高校につきましては塩尻志学館、さらには多部制・単位制につきましてはおお

むね独立校ということではないものの、先ほど来お話が出ています松本筑摩高校を例にする中で、こういう形が望ましいのではないかということでお示したという内容でご理解いただきたいと思います。

ただ中高一貫校につきまして、他の意見の中に「いい学校形態だ」というご意見があると同時に、例えば中等教育校とか先ほどの併設型の中学をつくっている学校の場合に、大きな 6 クラスというクラス編成をなかなかやっていない県が多くて、県によりますと、1 学年に 3 クラスとか 2 クラスの編成をしている県がございます。

そうした場合に小学校を卒業して中学・高校ということで非常に精神的にも多感な時期を過ごす生徒さんが、もう中学 1 年のころからでき上がった序列を引っ張って、6 年間で過ごすのがいいのかどうかというような意見もあるのです。そういう意味でひとつ狭い範囲の教育活動を、ずっと展開するのが果たしていいのかという意見があるということは、一応ご承知していただきたいと思います。

あともう一点です。先程太田委員さんからお話いただきました進学率の関係。これにつきまして、実はほかの県における 4 年制大学の設置状況とかそういうものを含めて、いろんなサイドから見ているのですが、実は現時点においてお出しできる分析ができておりませんので、次回あたりまでにあらためてお出ししたいと思っています。

見れば見るほどなかなか難しいものですから、あらためてもう少し分析結果を把握いたしまして、その上で次回にお示ししたいということでご理解いただきたいと思います。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。これについてはよろしいですかね。

それでは、魅力ある学校づくりから始まりまして、総合学科、多部制・単位制という話の議論を煮詰めてまいりました。

前回の委員会でもそのお話はさせていただきましたけれども、この第二通学区で県教委のたたき台となる、1 校ずつをどこにするかは別としまして、前向きに盛り込んでいくという形では、皆さんご意見をいただけますでしょうか。

そのとおり、みんなもういいよ。意見十分出たから決を採ってもいいというならば決を採らせていただきますし、もう少し意見を交わした後、その結果を出すという話であれば、もう少し議論を進めたいと思いますけれども。

（太田委員）

採決をとるのですか。

（飯島委員長）

この第 2 通学区に、県教委が示している多部制・単位制を、どこにするかは別として 1 校は設けよう。それから総合学科の学校を検討してみた結果、いろんな問題もあるかもしれないけども、それをクリアしながらひとつはどこかへ設けていこうというようなお話がありました。

これは学校再編のほうにも当然入ってきていますから、まだ早い、まだ県教委から「こういうたたき台になったデータをもらうまでは駄目だよ」という話になれば、もう少しい

ろんなご意見をいただいていこうかなと思います。

（太田委員）

ということは、中高一貫教育に関する今のような論議は、別に検討していくということでしょうか。

（飯島委員長）

ですから、そういうものに関しては要望として入れていくなら入れていく。要望としてどうなるか。またそれも、皆さんがもう少し議論をして、中高一貫も少なくとも今後考えてほしいという一文を入れていくならば、最終的に報告に入っていくでしょうが。ぜひつくれという言い方でも構いませんけれども。

（太田委員）

また論議が元に戻ってしまい恐縮ですが、どうして予備校経営が成功しているのか、それぞれの都市に予備校ビルが建てられるのか考える必要があると思っています。高い授業料を支払っても予備校に「進学」させるのはお客様がいるからであり、高校がその機能を十分果たしていないからではないかと考えます。高校がお客様の本当のニーズを受け止め、答えていないからです。

先生方はエリート教育といわれるような教育手段を嫌い、一人一人の能力に応じて、個々の生徒の持てる力を最大に伸ばすこと、それぞれの個性を引き出すことをよしとし、ここに教育の重心を置いているかと思っています。しかし、多くのお客様は、何よりも進学に向けて力を注ぎ、ここで十分な成果をだしてくれる学校、先生を求めているのではないかと考えます。

魅力ある高校づくりに関して、この点を考えずに論議はできないと思いますし、お客さまのニーズにお答えできる、知力、体力の修練に特化した学校づくりも必要と考えます。

長野県は山ばかりの、地理的には大変貧しい国だと思っています。私は、今までの信州教育の実績は、先輩諸氏がこの貧しさを「教育」により跳ね返していこうという気概をもって立ち向かい、培ってきていただいた結果だと思っています。これからも信濃の国を豊かで、将来明るい展望の持てる国にするためには、体力、知力に勝る人材をできる限り多く育て、各産業をさらに活性化し、世界に発信できる製品、商品の創造、新規の事業を興すこと等につきますと思っています。このような視点での論議をもっとおこなわなくてはならないと思っています。

これに関してもう一点、今回の改革案を作成する段階で、これからの長野県の国づくりについて論議があったのかどうか、多分なかったのではないかと思います。国づくりビジョンの提示がどうしてされないのか、疑問に感じております。この貧しき国を豊かで、住みよい国にするための基本方針、政策があって、このために教育をどうしていくのか、教育の役割、教育方針が導かれることなくしては、豊かな国づくりに向けた、長野県としての総合力が引き出せないではないのかと思います。

例えば、商工業、農業、林業等を今後どうしていくのか、方針、政策があって、これをもとに商業、工業、農業、林業教育のあり方、方向付けがされるべきではないかと思いま

す。商工業の振興をどうはかるのか、長野県の最大の資源である山林をどう活用するのか、食料自給率の改善という国家的課題を抱える中で、高齢化、過渡的段階にある農業をどう再興するのか等々の明確な方向付けがあれば、これに対して教育の範疇でどう答えていくべきか、どういう人材を育成すべきか等を考えることができるのですが、前提になるビジョンがいっこうに伝わってきません。このため、例えば、これからの実業教育をどうしていくべきか等の論議もしようがありません。

そういうことも考えまして、この案で一方向的に採決されるということは納得いきません。

（飯島委員長）

ちょっと誤解があったとかかもしれませんが、とりあえず多部制・単位制、総合学科について、1校ずつ設けるという提案をどうだというだけのことで、その後まだ要望事項がありましたら、当然私たちは十分議論をしていかなければいけないということです。

特に今の進学校というものを徹底的に、今まではある程度ならしてきたと思うんですよ。それが、もう一度突出した進学校をつくっていく方向でいくのか、それを単位制という形を取りながら持っていくのか。あるいは今までどおり、どこの高校もある程度のレベルで持っていくのか。

その決を採るのが早ければ、その議論をどんどんしてください。

（佐藤副委員長）

今の段階では、決を採るのはちょっと早いのではないかと思います。この委員会も今日で6回やりましたけれども、かなり絞ってやり始めたことは、前回くらいからなんですね。具体的に私自身が先ほど多部制・単位制についても定時制の学校、それに少し応用をしたくらいの認識の中で議論をしてきた。それは私が勉強不足ですが。

それから総合学科に関しては、中身についてだいが検討する必要があると思います。総合学科は中身はほとんどの委員さんは恐らく認識はないと思います。

今、たまたま学校の名前が挙がったのでその学校の中身をずっと考えてみたんだけど、あの中で普通科と職業科が入っていますよね。そういう中で職業科の位置付けはこれは全体を見渡して、ここの職業科は一切、今まで議論に上っていませんね。職業科の位置付けをしっかりと議論しないと、総合学科についても話ができないと思います。

その辺の中身をもう少し委員さん方の議論がないと、今、多部制・単位制ひとつ、総合学科ひとつといってもカリキュラムの問題もある程度突っ込んで話しておかないと、中身はどうなんだという話になりますので少し、もう少しやればいいのかと思います。

（飯島委員長）

分かりました。

それでは、もう少し議論をしてください。特に総合学科のほうはまだ十分ではないというお話もあります。以前の委員会で、塩尻志学館高校の学校要覧と文科省の総合学科についての資料が、お手元に配られていますよね。そんなものを含めながらご意見をいただければと思います。

(佐藤副委員長)

続けて、ちょっと質問だけいたします。

総合学科のカリキュラムについては県教委のほうでは、イメージとしては固まっていっているのでしょうか。例えば先ほど私が質問した普通科と職業科のカリキュラムです。

(柳澤教育主幹)

総合学科につきましては委員長さんのほうからお話しがございました、第2回だったでしょうか、塩尻志学館高校の学校要覧と文科省からの資料が出ております。この総合学科は、前にもお話をしたかと思いますが、普通科と専門学科、過去は職業学科と呼んでいましたが、今は専門高校、専門学科というふうに呼びますが、その2つの柱だった高校教育のところに、もう1本柱が立ちまして、新たな総合学科という学科ができたということでございます。

カリキュラムはどうかということですが、いわゆる職業高校に入りますと、その学科の専門の科目を3分の1くらいは必修単位としてやっていくことになります。専門性を追求していくと、こういうのが職業高校でございますが、総合学科のほうは「産業社会と人間」というのが特長だというのが前にもお話しがありましたが、自分の進路、あるいは自分の在り方、生き方、こういうものを勉強しながら自分は将来どういう方向に進んだらいいのかと、そういうことを考えながらいろいろな系列の中で、自分で学ぶ科目を選択していくことができると。こういう特長があるわけです。

従ってその系列なんです、これはどういう学科を母体に総合学科に転換をしていくか、施設、設備等の問題にもよって、系列の設置の仕方が違ってくるだろうというふうに思えます。志学館の場合は農業科、家庭科、商業科とか、そういったことを土台にしておりまして、資料に出ておりますような8系列で展開しております。

従ってどこの学校を転換するか、その母体が何かということによっても、その系列が違ってまいりますので、現在は候補案として出ておりますのは、丸子実業高校でございますけれども、商業、工業、家庭科、普通科と幾つかの学科を持っておりますので、そういったものを土台にしてさまざまな系列が考えられると思います。

(佐藤副委員長)

はい、分かりました。その中身に対しては十分、私は時間をかけて、じゃあそのためにどういう総合学科高校なのかということを、ある程度皆さんのコンセンサスを得ないと私は塩尻志学館高校や全国にあるそれが、長い目で見た場合に必ずしも成功しているとは断言できないと思います。ですからそれぞれの方のご意思があらうと思うのですが、そこら辺をきちんとして、決はいつでも採れますので、私はこの総合学科については意見がございますので、また後ほど発言いたします。

(飯島委員長)

決ということは撤回させていただきます。十分話を進めさせたいと思います。

なお、今の県教委のお話しですと、具体的にどこの学校という形になってこない、より具体的な内部を検討することができないのかなというの、県の答弁を聞いていて感じ

たわけです。そういうことになりますと、県教委がたたき台として出した丸子実業高校を取りあえず総合学科にするという仮定で、いろいろ議論を深めていくほうがいいのか、漠然として議論を深めていくほうがいいのか、その辺のところは非常に難しいところなのですが、ご意見を。

（太田委員）

委員長のおっしゃるとおりかと思いますが、総合学科というものの目的や内容をもっと明確にしていく必要があると思います。例えば地域との関係がどうなるのか、住民が参画できる余地があるのかなども論議しなくてはならないと思います。

また、残念ながら丸子町は交通の利便性が悪く、第2通学区の全地域からの通学は無理ですから、そういった観点からも、総合学科の目的に合致した場所の選定を論議する必要があります。

（原 委員）

総合学科については、前回もあらためて質問をさせていただきました。それで少し今の議論とかみ合わせて整理をしたほうがいいかなと思っています。具体的に、例えば塩尻志学館高校が総合学科に変わったと、そのことによって私の質問で、かつて塩尻高校が持っていた農業とかその他の専門性がどう変わったか。例えば資格が逆に取れるようになったか、取れなくなったかとか、そういう格好で質問を整理させてもらおうと思います。

それから2つ目は全国では大変多く総合学科がつくられていて、今は200くらいあるのでしょうか、それ以上なんでしょうか。それでいわゆる職業高校、専門高校から転換するケースと普通科から転換するケースがあるわけですね。それぞれの転換の前の形、普通科、専門科。そのことによって、どういうふうに特色が出てくるのか。

例えば工業高校などが母体になっていけば、重装備の学校ですからね、ある面、設備の点では有利な点がありましょうし、逆に言うとその重装備が重荷になるということもあるでしょうし。そしてまた普通科の場合では、今度は新しくさまざまな施設、設備を準備しなければいけない、これは膨大なお金がかかるだろうと想像されるのですが、いずれにせよ普通科から、あるいは専門科から転換する場合の特長を整理していただきたいと思います。

3番目は、これが一番問題なのですが、第3の学科と称して華々しく登場しました。それが、普通教育と専門教育を合わせていくというんですね。ですから、普通教育と専門教育を合わせるという、その具体的な姿は何なのかということだと思うんですね。

これも何しろ長野県はまだ1つですから、例としては1つだけに集中するのではなくて、さっき言った普通科から転換した場合専門科から転換した場合ということを踏まえながら、そこにおける普通教育と専門教育がどのような系列によってカリキュラムが組織されているか。そこら辺がとっても大事になってくると思うんですね。

私は前にも申し上げた記憶があるのですが、この考え方は、実は非常に大事なことだと思うのです。普通教育と専門教育をやっていくことは、非常に大事なことだと思いますので、そこら辺のところをお願いしたいと思います。

(飯島委員長)

これは県教委からお答えをいただきます。

(柳澤教育主幹)

資格取得の問題につきましては、冒頭の説明の中でも申しましたように、少しお時間をいただきたいということではありますが、ただ先ほども申し上げましたが、専門高校の場合ですと、その専門性に特化をして学習をしてまいりますので、その道での資格取得ということには当然つながっていくだろうというふうに思いますが、総合学科の場合はその系列によりまして、どういうふうな資格取得につながるかというのはまた違って来るだろうというふうに思っております。次回までに資料を整えたいと思います。

それから総合学科については先ほども申しましたが、普通科目と、いわゆる専門科目の両方を学んでいけるというのがひとつの利点で、基本的には総合学科は単位制で行われているということでもあります。

いわゆる専門高校の場合ですと、中学校卒業段階で、この道へ進みたいという明確な意思がある生徒さんの場合ですと、その専門高校を選んで、その自分が選んだ専門の教科科目を勉強していくのがいいかと思いますが、中学校卒業段階で、どうしようか、自分の将来にわたっていろいろな迷いとか、そういうことがある、そういう中ではひとつ、総合学科というのも選択肢としてあるということが大変重要なことではないかというふうに思っております。

しかしながら、これは決して全部を総合学科にするということではございませんで、当然いろいろな農、工、商の今までの専門高校というのも、それぞれの通学圏域の中に選択可能として設置をしておくということも、当然必要だろうというふうに思っております。

(荻原委員)

総合学科について、塩尻志学館高校の案内を見ても出口という言い方は悪いですが、進学は半分以上、就職はわずかというような学校で、大学、短大、専門学校を入れれば、9割近い格好で進学へ選択すると、そうすれば例えば上田染谷丘高校だとか小諸高校とか岩村田高校とか、そういった専門学校でみれば上田東高校とか小諸、軽井沢、野沢南といったような40%ぐらい、それで、大体短大は上田染谷丘高校だとかそういった学校と出口が大体同じなわけですね。

それで保護者からみれば大体3、3、3、になっていくような、就職も3割ぐらい、そんなような数字が挙がっていますが、総合学科にしてこういったキャリア教育、あるいは専門系のものをやって、目覚めてきっと大学、短大、専門学校に行くのだというふうになれば、例えば普通高校でそのカリキュラムの中に、キャリア教育というか、総合選択授業みたいなものを取り入れても、ただ進学率を上げたのが塩尻志学館高校ではないかと。

言い方は悪いですが、そうなれば普通の高校に、そういった格好で総合学科とは言わないまでも、キャリア教育というような格好で、だいぶ宣伝をしていますので、社会でどうかかわれるのか、そういったより進路を明確にする部分を取り入れれば、総合学科は必要ではないということではないですけれども、そういった反面教師で塩尻志学館高校でこうやって進学率が上がってくると。それはこういった具体的なカリキュラムを組んでい

るから、あるいは社会とのかかわりを教えているからということになれば、普通高校でもそういったものを取り入れてもいいのではないか。

私はその出口ということで見ればいいんじゃないかという気がするんですけどね。

（飯島委員長）

そうするとさっきの純粹の進学高校についてはどんなふうに。

（荻原委員）

進学高校についてこの辺では結局、上田高校、野沢北高校を見れば圧倒的なものですよね。90何パーセントというような格好で行っているわけですが、私はそういう高校はそれで、伝統もあるし、地域も行ってもらえばそれでいいのかなと。私は、下という言い方は悪いですが、中期というか、その辺のところを、やはりどこでもそういうニーズが高いわけですよ。専門学校を含めて進学したいという部分が。

この学校の計画を見ると、みんな工夫しているわけですね。それぞれの学校でコースをとったり、習熟度をやったり、そういったところにもう少し進学型の単位制なり、もう少し評価ができればいいのではないかというふうに、上のほうの高校は手をつけるなということではないですが、現状、そういった学校でやっているところの目をつぶさないで、中規模のほうを上げていくということが、一番いいのではないかという気がしております。

（芹澤委員）

今のご意見の中で、出口がほぼ同じだから総合学科はいらないのではないかというご意見ですが、私はごく単純にこう考えているのですが、なぜ総合学科があるかという、中学から高校に入るときに、自分がどの職業に向いているかなかなか分かりにくいと、判断しにくいと。同じ職業でも、電気科のほうに行くのか、極端な例ですが農業に就くのか分からない、分かるけどまだ十分判断できない。そういう人は総合学科へ行くことによって、一度にいろいろな分野の勉強をすることによって、ああ、こういうことなら僕はこのほうに行きたいのだと。あるいは普通学科のほうへも転科できると。そういう選択肢は広がる、中学から高校へ入る時点で十分に判断できない人に対して選択肢が広がる。そしてより良い、自分の適正に合ったものに向けられるというところに、総合学科のひとつのメリットがあるかなというふうに理解しておりますので、総合学科はやはりあったほうが良いと判断します。

（佐藤副委員長）

よろしいですか。

私の考えは、“先ほどの進路について迷っている段階で考える機会を与えるのは必要だ。”それは私も同感ですが、私は生徒さんには、私たち大人が余計なことを考えて、余計なことをやっているという感じがするのです。

8月15日付け信毎新聞の特色学科・コース制うんぬん言う記事をここに持ってきましたが、この中で中学の生徒にアンケートを採っていますがこの中で、基礎から学ぶ高校が

44.7%、それから単位制普通科 33.7%、これを合わせると約 80%近い子どもが、基礎学力をしっかりと身に付けたいと言っています。

その中学の生徒が高校へ行って、基礎学力というのは何かと言えば誰が考えたって、英、数、国、社、理科、これが基礎科目ですよ。これをしっかり学びたいと言っています。

どこかの時点で必ず選択が必要ということは私も分かります。少なくとも私はしっかりした基礎学力を身に付けていさえすれば、いくらでも選択肢は広がっていくと考えます。

そういう中で、高校の段階で専門科目と普通科目、これを交互に選択していけば、当然学力は落ちますよね。そういう中で本当になりたい職業に就いたときに、基礎学力が身に付いていないと大変苦労します。

旧制高校の教育が一番よかったというふうによく言われますが、確かによかったと僕も思います。旧制高校に入る前にはどのくらい勉強したか、基礎学力を身に付けたか。幾何 300 題、基本単語 3,000、それをしっかりやって、初めて旧制高校へ入った。そこで初めて、「おれは将来は何になろうかな」と、じっくり考えていったわけですよ。

せいぜいこの中学を卒業した段階で、両方を学んでというやり方では、これは虻蜂取らずの結果になると思いますね。ですから成功したというのはどうかなと思います。最初から基礎学力をしっかりと身に付ける学校、つまり普通科ですよ。普通高校をしっかりとつくて、そこで学力を身に付ける、そしてその段階で考えても僕は遅くないと思う。むしろそうしなければいけないのではないかなと思います。

(飯島委員長)

教育論になってきましたから、反論があるかと思いますが。どうぞ。

(市川委員)

総合学科に期待する面につきまして、芹澤委員さんの意見に合意する点と、さらに付け加えたい点とを、申し上げたいと思います。

私は企業の採用の関係をいろいろ担当していたことがありまして、各企業を訪問させていただいたり、説明会でお話を聞かせていただいている中で感じるのは、高校生、卒業生、うちのクラスの 3 分の 1 は就職をしましたけれども、その中で一番就職活動で感じていることは、企業の皆さま方が採用意欲を持てるような高校生を育てたいということを考えました。企業の採用意欲は景気の動向にかかわらず、人手でなくて人材を求めるところがありまして、多々話を伺っているところもあります。人とコミュニケーションができるような生徒がほしい、人間がほしいということがまず第 1 におっしゃっておられました。

そのようなことがありまして、私は企業の現場の製造過程に 2 ヶ月として同じ工程がないと、そういうような企業が製造業では数多くあるわけです。それで私たちはたくさんの企業が、この地域もあることは分かりますが、残念ながら昨年度は佐久地域は製造業ではあまり採用がございました。求人はあったのですが十分ではありませんでした。

しかし、求人の意欲は最終段階では 850 件前後の求人がありまして、高校生も驚いておりました。さらに短大に、あるいは専門学校に首都圏で学んでも帰ってくる生徒、戻ってくる生徒、それを採用するというケースもありまして、これは高校出たからの出口として、

社会の接点として高校の果たす役割は大変大きいなということを感じております。

いずれにせよ、子どもたちが高校を卒業してすぐに就職しないとしても、あるいは長野県に戻ってきて働く意欲のある生徒を育てていかないと、長野県は世界に輩出する人物をたくさん製造する場ではないし、有名企業、大企業に就職させる場でだけで終わっては決してならないわけです。これから少子高齢化を迎えて、私ももう10年で退職になりますけれども、そのときに不安になるような福祉関係、介護関係、どのような若者たちが私のところを見てくれるか、そんなのを多少見て大変心配になったのですが。

そういった感じで私が生徒を育てる場合には、学び続けていくような、社会の変化に対応するように学び続けなければなりません。従って学び続けられるような生徒が必要であると思います。

それから社会はあらゆる事象について専門性よりも、あることについてつながりが分かるような生徒がほしい。さらには地域に貢献するような意欲のある生徒がほしい、私はその3つをいつも考えています。

その点を考えたときに、例えばこの近くにある専門高校ですが、専業農家の子どもたちが来る、そこで勉強をしている。農業科の専門なんですけれども、そういう高校で、例えばその子たちが全部卒業をして農業を支えるかということ、そうではないのです。専業農家の子どもたちでさえ跡継ぎをしないわけです。

しかし、農業科が存在していて、立派な施設がたくさんあるわけです。私のいた高校では家庭科に被服科があるわけです。この子どもたちが家庭科の設備をたくさん利用します。もちろんパソコンもあります。製図の設備もあります。それでこの子どもたちはどこへ就職するかとういこと、結局バスガイドとして、バス会社に就職していたりとかする訳です。あるいは農業科は、まだ演習林もあれば、木工科で行きますとたくさんの大きな設備が用意されていて、たくさん利用されていて学んでいる訳です。同時に、普通科も併設されているわけなんですけれども、その子どもたちは一切関係なく、同じところに同居しているわけですが、そこで思うことは、普通科の子どもたちは座学に耐えられないという面もいろいろあって、学校の設備に目を向けていけばいいな。しかし同じところに施設がありながら、学科ごとに壁がありまして、同じレベルで利用できないわけです。しかし、我々がいろいろな面で農業につながりに目を向けたり、地域の木材加工、その他に目を向けたり、そういった生徒をつくっていかねばならないと思います。

そういった点で学び意欲を失っていく生徒が、普通科の中で例えば、早期退学生がたくさん出てきたりするわけなんですけれども、そういう点をつなぐための施設、その他、材料、専門の先生がたくさんそろっているにもかかわらず、壁がありましてお互いに使うことができません。

私は総合学科になった場合にはその壁を取り除くことができるのではないかと考えています。そこで私たちは総合的に子どもたちにこういうことが勉強だと、こういったコースもある、こういったことが社会につながっているのだよということを、総合的に子どもたちにいろいろな面で教えていくことができる学校が、1つくらい必要ではないかなと思います。

そうすることによって設備や先生方や生徒のニーズに対応した多面的な教え方で、学ぶ意欲を滋養できるような3年間を送るような、そういった高校ができるのではないかと、

私は期待するわけです。

実際はどうなるかは、ちょっと私は分かりませんが、ある程度そういうシステム的に総合学科にそうなるように期待するわけです。その例が塩尻の塩尻高校から塩尻志学館高校へ変わった典型例があると思います。

例えば、学科ごとにパソコンが用意されている。普通科のもの、製図のためのもの、そして農業科で学ぶ生徒たちのためだけのパソコンもある。そこで総合的に全部使われる。しかもたくさんある施設が、学校の内外にそろっている。それを生かさなければ損ではないかなと思います。私は子どもたちのために総合学科を置くことがよいことだと言いました。その点総合学科にはその壁を乗り越えて、柔軟に子どものニーズに合わせていくようなことがもしできるのならば、素晴らしいことだと考えておりますので、総合学科に期待したいと思います。

以上です。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

（西村委員）

お願いします。

冒頭、後半戦が始まる時に委員長のほうから、採決をするというお話がありましたが、総合学科について言いますと、前回相当議論をしました。「総合学科については前向きな議論が多かった。前向きに検討していきたいと思います」と、委員長はおっしゃいました。そういった意味合いから採決を採るとおっしゃったと思いますが、今日、いろいろなご意見が出て、まだまだ我々自身が勉強不足だし、総合学科についてどういうものかという認識が皆さんでばらばらなので、採決よりは、勉強することが必要だと思いました。

私のほうから個人的な意見を言いますと、塩尻高校が塩尻志学館高校に変わってからの、塩尻志学館高校の勢いについて前回もお話をしたと思いますけれども、やはりわれわれはメニューを増やしてあげないといけないと思うのです。

全国に総合学科が200幾つあります。これは悪い例もありますけれども、いいからこそつくっていくのです。悪い面もあります。そこを我々はこういう点を気をつけて総合学科として運営していったほしいということを言えば、私はいいと思います。どこまで踏み込むかというのはなかなか難しいことですが、私はぜひ総合学科というものをつくってほしいと思います。

今、長野県では塩尻しかないんですね。そうするとこの東信地区から行こうと思っても行けないのです。それを考えると東信地区でつくことは必要だと思います。

それから原案では丸子実業高校とありましたが、交通の便等々、今、太田委員のほうからお話がありましたが、交通の便、現在ある施設の問題、それからカリキュラムの問題等々考えて県教委から丸子実業高校という提案ができたと思うのです。その辺は県教委の方針を尊重したいと私は思います。

また個人的なお話をしますと、皆さんのおっしゃるとおり、基礎学力は本当に必要です。でもこれは、別に責任転嫁をするわけではないですけれども、小、中でしっかりと教えて

いくことが、一番大事なことはないかと思います。というのはこの夏にも、3月に卒業をした生徒が私の学校に何人か来てくれました。新しい環境になって本当に目を輝かせていろいろな話しをしてくれました。

でも、中にはもう進路変更をしようとしている生徒もいます。何を言ったかというところ「高校時代にもっとはっきりと、しっかりと自分の進路を考えておけばよかった」と言ったのです。そのメニューをどうしたらいいか。普通高校としたらある程度限界があります。そんな場合は総合学科のメリットというものを照らし示していければと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

(和泉委員)

今、総合学科の話が出ていますが、今日いただいた資料の2番ですね。これは高校改革プラン検討委員会の最終報告の中にも書いてありますが、今日はちょっと中身だけについて、私は民間企業なのでコストの面を見ますが、今日いただいた資料の中に、県高等学校の年間授業料と入学料。それで施設、設備というのが、これは斜線になっています。

前回の報告のときに、予算の内訳を教えてくださいといったら、「県の運営の中でほぼ9割弱が人件費です」と回答をいただきました。しかし私立はこのほかにたぶん、私が想像するに、収入というと入試の試験での受験代だとか、それぐらいで、これだけのことを、やはりコストパフォーマンスの中で、あるいは文部科学省の補助などは別にしまして、やっていたのだらうと思います。

そこで私は、やはり県高等学校の施設設備費が、斜線に入っていますが、何かしら仕組みはあるんだと思うのです。私立の場合は平均で26万5,281円。やはり時代のニーズについて行くためには、やっていかなければいけないことだと思います。新しい工具が出てきたり、勉強するツールが出てきたり、あるいはパソコンを買ってやらなければいけないとか、あるいはメンテ、設備、補強、あるいは安全なための施設をつくらなければいけないとか、それから海外事業があったり。

ある面ではそういうことが、やはりお金の中で、いい子どもたちが勉強してもらうためには、何かしらそういうことがあるんだと思うんですよ。

そういう意味合いで私は、この下のほうには、県立高等学校の費用というか、学校が徴収している数字が出ましたけれども、そういう意味合いで言ったら、要するに先生を1人、私は分かりませんが、600万か700万か人件費コストパフォーマンスをやっていく、そういうこと。それから設備の有効利用とかということ、小さな縦割りの学校に、ある程度1台そろえるにしても、パソコン10台ずつそろえるにしてもやはりそれなりにかかる。

そういう意味合いではある程度、今回の中で統廃合という言葉がいいかは別にして、絞り込んで、そのうちの一部であって逆にそこにかかるコストをもうちょっと、減らせると。勉強する、勉強しないという、勉強しようという環境、設備、そういうことに使っていくということが必要だと思います。だからこの東信の中で、少子高齢化と財政上の問題だということは、明確に最終報告の中にうたわれているんですね。

そういうことで絞り込みの中だとか、効率性のあったとき、だから小さい学校だと、こ

の前の話しだと、理科の先生を何人そろえなければならないという話があるので、それが高校が大きくなると、先生たちにはコストパフォーマンスの時間が、ちょっと従来より増えるかもしれないけれど、それはやはり、私は今回の財政の中での、ひとつの切り口の、やはり我々は税金を納めていますから、そういうひとつの視点ということは、私は1人としていいものだと思います。

だから必要である、必要であるということではなくて、じゃあそれはどこが、誰が負担するのと、じゃあどういう有効性があるの、どういうふうに使っていったらいいのという視点だけは、最初の最終報告の中に文言としてうたわれているという、あの中に入れて討議したいと思います。

(小林委員)

私は総合学科はあったほうがいいと思っています。前回質問した、子どもたちへの希望は普通科が一番多くて、その次が工業で、商業高校がたくさんあるのに、総合学科が約8%で少し多く不思議に思い質問しました。

2年生のアンケートということで、前回話していただきました。3年生になりますと志望校決定、なぜそこを志望するかと、これは6月の調査ですけれども、学力に合うということが1番、2番が学びたいことが学べる、それから3番が通学時間と、こうなっているわけです。

子どもたちが一番行きたいというのは、自分の学力に合うと言うが、それは本当だろうか。先ほどから、高校へ入ったときに自分の進路を決めることができない、どこにするかというので、ちょっと手間取ったなどいろいろ話がありましたけれども、そういうことを考えますと、総合学科に籍を置きながら、その学校でそういうカリキュラムを組んでいただいて、自分に合うものを探していく。

卒業してから探すのが私たち大方の者ですけれども、そういうことを考えたときには、自分に合うか分からない子どもたちが入ってきた時に、そのニーズに応えられるような場を提供する、そういう高校があればいいのではないかと考えています。

それで3年生の中にほしい学科ということで、1番、体験、実習ができる場がほしい。そのほかコンピューター情報、スポーツ、健康、農、商、工、こういうような学科がほしいというようなことを希望しております。

それからほしい高校としては、繰り返し言いませんけれども、基礎から学ぶとか、単位制高校、普通高校、総合学科、というようなこともあります。いろいろな面から考えて普通科とか、あるいは農業科、商業科、工業科ということではなしに、そういう自分が選べるような、総合学科高校があってもいいのではないかと思います。

もし、もう少し議論をして、私の理解が深まれば第2通学区に、1校ではなくて2校あってもいいのではないかと考えていくのではないかと、思っています。

(西村委員)

先般、佐藤委員のほうから基礎学力についてお話しがございましたね。個人的な話なんですけど、旧制中学とか、高校時代のお話がありましたが、たぶん高校の役割が変わってきたのではないかなと、私は思っているんですね。

それはどうしてかという、今までは年功序列、それから終身雇用制でした。だからある組織に入ると、そこで教育ができたのです。ところがそれが、だんだん社会、経済とかが変わってきて、崩れてきました。今は年功序列、終身雇用が変わってきたという状況です。

その中で我々は、どういう教育をすべきか。そのときに、これはいつも言われますけれど、やはり高校のときにある程度、これはいつも言われますけれど、職業観を考えた、それを身に付けた上での進路選択をしていかないと、ある意味でなかなか難しい時代になったのではないかと。従って、そういった状況の中で高校の役割が変わっていると思うのです。

それは人間、学力だけではいけません。変化している状況の中で、県教委のほうも総合学科とか、そういうものを導入するべきではないかということを決めたんだなと思いました。私も本当にそんな感じがしております。

（中沢委員）

今、西村委員さんのほうからおっしゃったことと重なりますが、義務教育の段階においても、将来自分がどういう仕事をしたいのか、職業観を育てるということはすごく大事な1つで進路学習の根幹をなすことなんですね。その辺はやはり職業観というのはなくて、なんとなく行ける学校に行く、そのまま大学に入っていくことだと、結局自分のなんというか、将来像というものを持てないと思うんですね。そうでなくて、やはり自分は将来こういう職業に就きたい、そういうものがきちんと確立して歩んでいくことが、私はその子どもの一生における、大事なことだと思うんですね。そういう点において、総合学科ということは、それにかなり答えられる点があるかと思います。

2年、3年次における、塩尻志学館高校では8系列ですよ。この8系列が備えられる高校というのは、なかなか普通科の中では難しいだろうと思うし、専門学科の高校でも難しいと。その点においては、自然文化、社会系列から始まって、情報ビジネス等ありますけれど、それは総合学科、ほかの学校になれば8系列、7系列になるかもっと9系列になるかは分かりませんが、そういった多様性に応えられる系列が備えられていくということは、自分たちが職業観を持っていくという点においても、私は非常にいいことだと思います。

（飯島委員長）

はい。ありがとうございます。

ほかにご意見いかがでしょうか。

（佐藤副委員長）

はい。簡単に。

私も総合学科のいいところは分かります。ですが私は時期的にこの時期でいいのかということをお願いしているわけです。

今、例えば私は理系の大学にずっといたのですが、今は企業は理系の生徒も大学院を出なかったら使い物にならないと、こういう時代です。4年生大学は一般教養課程の感じで

見ていると思います。

そうした状況の中で、今は高学歴社会になっています。中学、高校は基礎学力をしっかりやる期間じゃないのかなと思います。それがあればいろいろ対応ができる。いろいろな職業の選択も可能になる。この総合学科をやったおかげで、かなりせめられた職業の選択になってしまわないかと危惧（きぐ）するんです。

私も大学で教えていて、結局最後に伸びる学生というのは普通高校を出て、しっかり基礎学力をつけた学生が伸びてくるんですよ。それで今は、企業のどこでもそうですけれど即戦力なんていうことは全然当てにならない。そんなのは、即戦力というのは即身に付いちやうわけで、即駄目になっちゃう。ですから私は基礎学力が、やはりしっかり若いうちに付けておかないといけない。さもないと自分の職業の選択肢がうんと狭まっちゃうよ。

そういう意味で私は、先ほどカリキュラムが大切だと言ったのは専門課程と普通課程を同時に勉強するなんてそんな生易しい勉強では、いろいろなことを知ったけれども何の役にも立たない学力になっているのではないかなと私は危惧するもので、総合学科をつくる場合には普通科目にかなり重点的なウェイトを置いた科目、そういうものをしっかり組んでいく必要があると思います。

専門と両方を勉強するなんてことは不可能。ただ「こういうのがあったね」というだけで終わってしまうような学問になってしまうというふうに感じています。

（宮阪委員）

総合学科ということで、候補案では丸子実業高校ということで挙がっていますが、東信全体のことでなくて申し訳ありませんけれども、上小地域では、現在の学校数を維持していくということが適切であるということでありますけれど、丸子実業高校を総合学科にするということは、実質的に普通科を減らして職業科を増やすということと理解しますと、現在の丸子実業高校の普通科の3クラスはどうになってしまうのかということなんです。

さっきも利便性が悪いというご意見が出ましたけれども、私の中学はもっと利便性が悪いところにありまして、南部中学校、和田中学校、丸子中学校といった地域の子もたちの、普通科志望の生徒たちは上田まで行かなければならないということになってしまうのか、ということなんです。

幾つかの系列があって総合学科高校ができるという説明ですけど、今の丸子実業高校は普通科が3クラスあります。そのほかに農業科とか、土木科とか、家庭科、商業科とかがありますが、系列というところに普通科系列というものをに入れて、系列の1つとしてやっていくというのは、設置していただけないのかと希望します、そういう形であれば私は賛成ですので、よろしくお願いします。

（飯島委員）

はい、ありがとうございます。お答えは今、いいですね。今日はもう時間がありませんから、もうひとつ。

(太田委員)

よろしいですか。

私も企業で人事部門を長くやりまして、何百人の応募者の面接をやってきました、入社からその後の成長の度合いなどを時間軸でみてきています。佐藤委員のただ今のご意見にありました、専門性についてですが、企業では、きちんと専門性のともなう基礎学力を付けてきている人間が伸びています。商業科、電気科、機械科など専門的に学べる学校の出身者は職業人として伸びが速いし、安心してみていられます。

総合学科単位制の導入により、専門性が薄まる結果になる可能性があるなら、この観点からもっと内容を論議する必要があると考えます。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございました。

時間になってまいりました。だいぶ議論が深まってきております。ただ総合学科とか、進学とか、職業観とかいろいろなことを迷っている子どもたちを、何とか救おうということで、全部の学校を総合学科にするのではないということが、ひとつあるのではないかなと思います。そういう迷っている子どもたちを救うために、どうだろう、第2通学区に1つは。先ほどは2つあってもいいという意見もありましたけれども、そんな感じを私もしております。

時間になりましたから、これから議論を深めていくには、どうしてもたたき台、たたき台と言われていた教育委員会で示された、個々の学校がなぜ出てきたのか。前々から太田委員さんが言っていました、どうしてそういうものを県教委が示したのかというポイント等を、今回はデータ等を出していただきながら、また議論の参考にしていくということで事務局にお願いしたいと思いますけれども、よろしいでしょうか。

(植松主任教育支援主事)

はい。

(飯島委員長)

はい、では次回にはご用意いただいて、それをまた総合学科、多部制・単位制、そういう議論のたたき台にしていく。出された学校がそうだという意味でなくて、たたき台として参考にしていくという意味でお願いしたいと思います。

それでは、今日の委員会はまだ少し時間がありますが終わりにしまして、次回の委員会はどんなふうにするのか、事務局のほうからお願いいたします。

(植松主任教育支援主事)

はい、それではお願いいたします。

次回の日程でございますが、9月に入りまして、7日の水曜日、平日でございますが、午前中を候補に考えているところでございます。

よろしくお願ひしたいと思ひます。もう1回については、まだちょっと調整中でございます。また分かりましたら早めにご連絡差し上げたいと思ひます。

(市川委員)

7日は、午後からというのは分かっていますか。

(植松主任教育支援主事)

午前中を考えています。

場所につきましては、一応、上田周囲を考えています。

(飯島委員長)

どうでしょうか、今の時点でご納得いただけましたか。

(市川委員)

原則、日曜の午後ということで確認させていただいていまして、平日に移動してきた理由ということが分からないですけれども、勤務の関係がありまして、現場を離れるということは、現場に大変迷惑をかけます。

大変なことになって、今日も朝から保護者との対応で電話でやりとりをしながらこちらに来たという状況ですので、できれば原則、最初に決めたことを守っていただくような方向はできないでしょうか。

(飯島委員長)

事務局、どうでしょうか

(佐藤副委員長)

それは向こうの委員はまだ現職の方が多いから。できれば日曜というのはいいんじゃないかな。最初はそういうことで提案したのだけれど。

(飯島委員長)

7日はそういう、水曜日ですが、その後からは日曜日に入れていくというような形で考えていただければ。その辺どうでしょう。

(植松主任教育支援主事)

委員の皆さまのご要望であれば、そういうような形で調整していきたいと思います。

(中沢委員)

私もこの9月7日は避けられない会議が入っていて、できれば土曜日、日曜日のほうが。

(吉江高校教育課長)

そうしましたら、恐縮なんですけど、再度皆さまにファックスを入れさせていただいて、取りあえず9月7日はかっこ書きでの日程をお入れいただくといたしまして、もう一度調整の上で委員長さんとも、再度ご相談させていただきまして、ご案内申し上げるというふうでお願いします。

(飯島委員長)

それでは事務局のお話で、そうしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

はい、それではそのように、次回はまた事務局から伝達の上、開催したいと思います。
今日は以上で終わりたいと思います。

ありがとうございました。